

Title	中国・全国運動会小史
Sub Title	The People's Republic of China : short history of national athletic meets
Author	笹島, 恒輔(Sasajima, Kosuke)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1983
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.23, No.1 (1983. 12) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00230001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国・全国運動会小史

笹 島 恒 輔*

1. は じ め
2. 清 朝 時 代
3. 中 華 民 国 時 代
4. 中 華 人 民 共 和 国 時 代
5. 全 国 運 動 会 の 中 国 ス ポ ー ツ 界 へ の 功 績
6. む す び

1. は じ め

中国語の運動会は日本語の競技会に当る言葉であるので全国運動会とは全国競技会のことであるが、本論においては中国語の全国運動会で論述してゆく。

中華人民共和国においては1983年9月16日～30日に上海において第5回全国運動会が開催される。全国運動会は日本の国民体育大会のような競技会で、選手の出場単位は省、特別市（省と同格の市）、自治区（少数民族の居住地区）、解放軍となっており、第1回は1959年に開催され、4年に1回開催すると定められている。

全国運動会は中華人民共和国成立後に行なわれるようになった競技会ではなく、その前身に当る第1回の全国的競技会の開催されたのは清朝末期の宣統2年（1910年）であり、中華民国になると競技会の名称も全国運動会となり、中華民国時代には1914年を最初に1948年まで6回開催されている。

中華人民共和国では1959年を第1回として1983年までに5回の開催となっている。

1910年から1983年までの73年間に12回の開催に留まっているのは、国内の政情不安や戦乱等のためである。

* 慶應義塾大学体育研究所教授

中国・全国運動会小史

本論文はこの全国運動会の経緯について述べ、その中国スポーツ界への功績について言及するものである。

2. 清 朝 時 代

中国の開国は日本より早く清の道光22年(1842年)であり、開国後、多くの西欧人が中国に来住し、中国人に西欧のスポーツを紹介した。

清の光緒30年(1904年)に米国Y. M. C. A. は M. J. Exnor を中国に派遣し上海に Y. M. C. A. の体育部を設立した。

宣統2年(1910年)に南京で南洋勸業博覧会の開催されるのを利用して Exnor は「全国学校区分隊第一次体育同盟会」を開催した。この大会は中華民国成立後に第1回全国運動会として追認された。

この競技会は、宣統2年9月16日～20日(当時の中国は太陰暦を使用していたので、太陽暦の10月18日～22日)に開催された。全国高等組分区競技、全国中等学校組分区競技、学校聯合競技の三つに分けて実施され、前二者は地区対抗の形式で行なわれた。

地区対抗は、華北、華南、武漢、呉寧(蘇州、南京)、上海の5地区に分れ、華北は青、華南は紫、武漢は黄、呉寧は藍、上海は赤の色別を使用した。

参加人員は140人で、華北20人、華南28人、武漢21人、呉寧31人、上海40人となっていた。また、学校聯合の参加校は上海の聖約翰大学と南洋公学(後の交通大学)、天津の青年会日校、工業専門学校と軍医学校、通州(河北省)の協和書院(後の北京協和大学)、武昌の文華大学であった。

競技種目は陸上競技、サッカー、庭球、バスケットボールの4種目であり、陸上競技においては、高等組と学校聯合が100碼、220碼、440碼、880碼、120碼障害、走高跳、走幅跳、棒高跳、砲丸投(12磅)、ハンマー投(12磅)、880碼リレーであり、中等組は、50碼、100碼、150碼、440碼、走高跳、走幅跳、砲丸投(8磅)、880碼リレーであった。陸上競技においては1位5点、2位3点、3位1点の得点法により優勝を決定した。

競技結果は、

陸上競技

全国高等組—1位上海52点、2位華北15点、3位華南13点、4位呉寧12点、5位武漢7点。

全国中等組—1位華北39点、2位華南24点、3位上海6点、4位呉寧3点、5位武漢0点。

学校聯合—1位聖約翰大学37点、2位南洋公学34点、3位天津青年会10点、4位武昌文華大学9点、5位天津工業専門学校6点、6位協和書院3点。

中国・全国運動会小史

他の競技は地区対抗

サッカー—優勝華南

バスケットボール—優勝華北

庭球一日没のため準決勝、決勝は実施不能となったが、審判員は準決勝出場の4人が全員聖約翰大学の学生であったので、後日学内で結着をつけるという判定を下した。

大会には華西地区からは参加しておらず、また、地区割りも沿海の大都市中心の区割りであった。大会の役員、審判も総て外国人であり、文書もほとんど英文であった。

大会の組織も競技規則も未整備であり、陸上競技の各組の出場者の資格についても制限がなかったため、高等組に出場した者が中等組、学校聯合にも出場していた。
(1)(2)

注 (1) 呉文忠著「中國近百年體育史」(民国56年～1967年)、台湾商務印書館、33～38頁。

(2) 成都体育学院體育史研究室編著「中国近代體育史簡編」(1981年)、人民體育出版社、47頁。

3. 中華民国時代

宣統3年(1911年)の辛亥革命によって清朝は倒れ、1912年に中華民国が成立した。中華民国は成立したというものの未だ国内は統一されず、政権を掌握した北洋軍閥の袁世凱に反対する第2革命、第3革命と続き、袁の死後段祺瑞の安徽派が勢力を得、ついで呉佩孚のもとに集結した直隸派が政権を掌握し、次に張作霖の奉天派が優勢となり、めまぐるしい軍閥の戦争を繰り返していた。また、民国12年(1923年)には国民党は広東政府を樹立して北の軍閥の北京政府と対立していた。

国民党は民国14年(1925年)に北伐を開始し上海・南京をまたたくまに占領し、北伐軍の將蔣介石は上海クーデターを断行し共産党を弾圧し南京政府を樹立した。南京政府は広東から武漢は移った武漢政府と対立したが、武漢政府もまもなく共産党と訣別して南京政府に合流した。

国民政府は北伐を再開したが、民国17年(1928年)に張作霖の死によって中国全土は国民党の支配下に入った。

民国20年(1931年)の満州事変以後日本の中国進出は激しくなり、民国26年(1937年)には日中戦争が起こり、太平洋戦争へと発展していった。太平洋戦争は民国34年(1945年)に日本の敗北で終了したが、日本の占領地をめぐって国民党と共産党の対立が激しくなった。米国の調停によって国共停戦がなったが、国民党の施政方針を共産党は不満として民国36年(1947年)1月に国共の内戦となった。国民党軍は始めは優勢であったが、民国36年の夏ごろからこれが

中国・全国運動会小史

逆となり、次第に各地を共産党軍に占領され、民国38年（1949年）12月に国民政府は台湾に移転した。

中華民国の統治した37年間は一時小康を保った時期があったとはいうものの政情の不安と戦乱が続いたために全国運動会は6回しか開催されなかった。

国民政府教育部は民国24年（1935年）3月11日に「全國運動大會舉行辦法」を公布して開催についての規定を定めたが、その規定通りに実施することは不可能であった。

「全國運動大會舉行辦法」は、

1. 国民体育を提唱するという主旨のため2年毎に全国運動大会を首都と各省市の適当な地と交互に挙行する（第5回主都、第6回各省市、第7回主都、第8回各省市）。
2. 大会の開催地は首都以外では交通が便利で体育施設の完備している省市をかわるがわる選定する。首都での大会の終了時には次回の開催地を決定する。
3. 各回の大会は秋に挙行する。
4. 各回の大会の組織規定は22年は首都で挙行した第5回大会の各項の規定を基本として、各回の開催地の状況により教育部が準備し開始前に制定して公布する。
5. 大会の必要経費は中央と地方が分担することを原則とする。首都で開催の時にはその経費は教育部を経由して政府に請求して国庫から支出する。省市で開催する時の経費は地方政府が負担するが、特殊の事情のある時には教育部に要請して政府から補助をしてもらう。
6. 大会の準備委員会を首都に設ける時は教育部の中に置き、各省市に設ける時には省市の教育行政機関内に置く。
7. 本辦法は教育部より行政院に願い出て批准し施行する。

というものであったが、同法の公布された民国24年（1935年）に第6回全国運動会が上海で開催され、規定に従えば民国26年（1937年）秋に首都の南京で開催される筈であったが、同年7月に日中戦争が起こったために実施出来なくなった。そのため、「全國運動大會舉行辦法」は公布されはしたものの実際には空文であった。

中華民国は清の宣統2年（1910年）に開催された「全国学校区分隊第一次体育同盟会」を「第一回全国運動会」として追認し、中華民国成立後の第1回の大会を第2回全国運動会とした。⁽⁴⁾

第2回全国運動会

第2回全国運動会は民国3年（1914年）5月21日～22日に北京の天壇で挙行された。第2回大会の主催者は北京体育協進会となっていたが、実際の責任者は北京 Y. M. C. A. 幹事の米人 A. N. Huagland であった。⁽⁵⁾

競技は全国を東、西、南、北の4地区対抗として行ない、東部は黄、西部は赤、南部は緑、北部は白の色別を使用した。

中国・全国運動会小史

競技種目には新たにバレーボールと野球が加えられ、陸上競技、サッカー、バスケットボール、庭球、バレーボール、野球の6種目となった。

得点方法は陸上競技の10種競技と5種競技は1位5点、2位3点、3位1点とし、他の種目は1位3点、2位2点、3位1点とした。球技については、サッカー、バスケットボール、バレーボール、野球の4種目は1位のみ5点、庭球は単、複とも1位3点、2位2点となっていた。

競技結果は、

陸上競技—1位華北71点、2位華東24点、3位華西12点。

球技優勝—サッカー—華東、野球—華北、バスケットボール—華北、バレーボール—華北、庭球—単華南、複華北。

得点合計—1位華北91点、2位華東29点、3位華西12点、4位華南5点。

第2回全国運動会の参加者数は明らかではないが、陸上競技の参加者は96人であった。今回も陸上競技はヤード、ポンド制で実施された。また、主要な競技役員、審判等は総て外国人であり、競技会の開催要項、プログラム等も英文であった。⁽⁶⁾

第3回全国運動会

第3回全国運動会は第2回大会の10年後の民国13年(1924年)5月22日～24日に湖北省の武昌で開催された。水泳と野球の審判に外国人が入っていたが、その他の競技の競技役員、審判員は総て中国人となり、大会会長は熊秉三、審判長は張伯苓であった。

競技は華東、華北、華南、華中の4地区対抗の形式で行なわれ、陸上競技はヤード、ポンドからメートル制に変更となった。

競技種目に新たに水泳が加わり、エキジビションとして女子の球技、国術(武術)、器械体操が行なわれた。

参加人員はバスケットボールに出場したフィリピンの華僑を含めて340余人であった。

競技結果は、

陸上競技—地区対抗、1位華北113点、2位華東108点、3位華中28点。省別得点、1位江蘇省(華東)101点、2位河北省(華北)83点5、3位湖南省(華中)22点、4位山東省(華北)21点5。

水泳—1位華中42点、2位華南27点、3位華東8点。省別得点1位湖南省(華中)39点、2位広東省(華南)21点、3位江蘇省(華東)8点。

球技優勝—サッカー—華東(4チーム参加)、野球—華東(2チーム参加)、バスケットボール—華北(6チーム参加)、バレーボール—華南(4チーム参加)、庭球—地区不明。

総合成績—1位華北、2位華東、3位華中、4位華南。

となっていた。⁽⁷⁾

華南は参加者も少なく出場種目もバスケットボール、バレーボール、陸上競技、水泳のみであった。⁽⁸⁾

第2回、第3回全国運動会において華北が優秀な成績を取っていたのは、華北が中華民国成立後から北伐完成までの間に北京政府の統治下に在り、他地区に比較して政情が安定していた。そのために民国2年(1913年)から第3回全国運動会の開催された民国13年(1924年)まで毎年華北運動会を開催しており、その結果によって選手を選考していたためであろう。華北運動会の競技種目は第1回は陸上競技のみであったが、第2回からは陸上競技、バスケットボール、バレーボール、サッカー、野球、庭球となっており、全国運動会の競技種目のうち水泳が含まれていないだけであった。第3回全国運動会において華北は水泳以外は上位入賞しているのも華北運動会を実施していたためであろう。また、第3回の野球出場の2チームは華東と華北である。

その他の地区が全国運動会の出場選手を選考する地区の大会を開催するようになったのは華中が民国12年(1923年)であり、華東、華南で地区の競技会を開催するようになったのは、国民政府により中国が統一された民国17年(1928年)以降である。⁽¹¹⁾

第4回全国運動会

第4回全国運動会は民国19年(1930年)4月1日～10日に浙江省杭州で開催された。この第4回全国運動会は民国15年(1926年)に広東省廣州で開催を予定していたが、国民党による中国統一のための北伐が前年に廣州から始まったという政治情勢のために中止となり、国民党が北伐を完成して中国を統一するまで延期されていたのである。⁽¹²⁾

「全国運動大会総報告」によると、第4回全国運動会は雨天のために一日順延されて4月11日終了した。今回からは地区対抗ではなく、省、市(特別市一省と同格の市、上海、天津、北平<北京>等)、特別区(特別市と同様に扱われている地区)、華僑団体を参加単位とした。第4回に参加したのは14省、5特別市、1特別区、香港、神戸華僑の22単位であった。⁽¹³⁾

男子の種目は前回と同様であったが、今回から女子の陸上競技、バスケットボール、バレーボール、庭球が新たに競技種目となった。参加人員は男子1,163人、女子464人の計1,627人であり、男子のみの参加は北特区、綏遠省、山東省、香港と神戸華僑であり、参加人員の多かったのは上海198人(男子141人、女子57人)、江西省157人(男子105人、女子52人)、湖南省152人(男子115人、女子37人)であり、100人以上参加したのは浙江省、遼寧省、湖北省、南京であり、参加人員の少なかったのは北特区9人、四川省10人(男子9人、女子1人)、神戸華僑10人、綏遠省12人、山東省14人であった。神戸華僑は男子バスケットボールのみの出場であった。⁽¹⁴⁾

「全国運動会総報告」によれば球技は総てトーナメントによっており、組合せ抽籤は競技結⁽¹⁵⁾

中国・全国運動会小史

果から見て順当と思われたが、男子バスケットボールの1回戦で北平対湖南省戦が2—0であるのは組合せのいたずらと思われる。一方に天津対江西省は153—4であった。⁽¹⁷⁾

総経費195,800元のうち浙江省が10万、国民政府が3万、他は参加単位から支出されていた。⁽¹⁸⁾

競技結果は、

種目優勝

男子 陸上競技—遼寧省、水泳—香港、サッカー—上海（10チーム参加）、バスケットボール—天津（16チーム参加）、バレーボール—広東省（14チーム参加）、庭球—広東省（13チーム参加）、野球—香港（6チーム参加）

女子 陸上競技—広東省、バスケットボール—北平（15チーム参加）、バレーボール—上海（14チーム参加）、庭球—天津（10チーム参加）。

単位別得点

陸上競技男子 1位遼寧省49点、2位上海45点、3位広東省16点、4位天津15点5、5位北平15点、6位江蘇省7点、7位南京5点5、8位ハルピン特別区5点。福建省5点。

陸上競技女子 1位広東省20点、2位ハルピン特別区17点、3位北平9点5、4位湖北省9点½、5位遼寧省7点、6位南京3点5、7位湖南省3点½、8位天津3点、9位上海1点。

水泳 1位香港58点、2位遼寧省19点、3位広東省12点、4位上海6点、5位湖南省2点。⁽¹⁹⁾となっている。

各種目の優勝、得点上位の地方はほとんどが沿海の省、市または外国人の多く居住している地方である。これらの地方には教会学校（ミッションスクール）や外国人経営の中国人教育機関も設けられていた。日本においても初期のスポーツは外国人によって指導されたものが多く、また、初期には学生が主としてスポーツを行っていたのであるが、中国においても同様であり、外国人の指導の下に学生が実施していたのである。⁽²⁰⁾

沿海の諸省はこれらの点からしてスポーツの先進地であるので上位入賞も当然の結果と言えるであろう。また、遼寧省には日本の租借地の関東州があり、スポーツに熱を入れていた南満州鉄道株式会社の所在地であったのである。

第5回全国運動会

第5回全国運動会は第4回大会終了時に民国20年（1931年）に南京で開催と決定されていたが、同年9月に満州事変が起こったために開催が不能となり、改めて国民政府は民国22年（1933年）10月に開催と定めた。

第5回は民国22年（1933年）10月1日～20日に南京で開催された。

競技種目は新たに男女の国術（武術）と女子の水泳、ソフトボールが加わり、陸上競技の採点方法が、トラック、フィールド、5種競技、10種競技と分れ、それぞれに優勝を決定するこ

ととなった。

参加単位は22省、4特別市、香港、インドネシア華僑、フィリピン華僑の29である。

「中國近代体育史簡編」によれば参加単位33、実際に到着したのは30単位とあり。「中國百年體育史」,「中國體育發展史」は共に参加単位を30としているが、参加単位一覧で数えると29にしかない。或いは巴達維亜華僑とあるのが、ジャワ、スマトラの2団体であったのかも知れない。

参加22省のうちには日本の占領下に入った遼寧、吉林、黒龍江3省からの出場者もあった。²³

この3省の出場者が日本の占領下にあった東北3省から出場したのか、あるいは3省以外に居住している3省出身者が出場したのかは不明である。

参加人員は2,248人(男子1,542人、女子706人)で、参加人員の多かったのは上海177人、江西省174人、広東省163人、湖南省152人、河北省、江蘇省137人、四川省126人、南京121人であった。

競技結果は、

陸上競技 男子 トラック 1位上海25点、2位北平13点、3位河北省13点、4位遼寧省11点、5位山西省7点、6位山東省6点。

フィールド 1位上海30点、2位北平26点、3位江蘇省6点、4位河北省6点、5位南京5点、6位遼寧省3点。

10種競技、5種競技 1位上海44点、2位北平18点、3位広東省14点、4位南京8点、5位福建省4点。

陸上競技 女子 1位上海64点、2位広東省36点、3位山東省14点、4位河南省7点、5位北平7点、6位湖南省6点。

水泳 男子 1位広東省44点、2位香港18点、3位遼寧省13点、4位北平8点、5位上海5点、6位福建省、河北省3点。

女子 1位香港45点、2位広東省14点、3位青島4点、4位遼寧省1点。

球技優勝 男子 サッカー—上海(17チーム参加)、バスケットボール—上海(23チーム参加)、バレーボール—上海(15チーム参加)、庭球—上海(17チーム参加)、野球—広東(7チーム参加)。

女子 バスケットボール—上海(17チーム参加)、バレーボール—上海(14チーム参加)、庭球—山西省(16チーム参加)、ソフトボール—広東省(9チーム参加)。

となっており、上海が総合優勝をした。²⁴

第6回全国運動会

民国21年(1932年)10月10日に教育部より「國民體育實施方案」が公布され、その第三推行

中国・全国運動会小史

方法（五）各種集会甲各種運動の(1)に、「全国運動会は2年に1回挙行する。その実施方法は教育部体育委員会がこれを決定する。」とある。

この「國民體育實施方案」に従って第6回全国運動会は民国24年（1935年）10月に上海で開催と決定された。

第6回大会は予定通りに民国24年10月10日～20日上海で開催された。第6回大会には新たにエキジビションとして重量拳、競歩、ポロ、自転車、蒙古相撲、小型サッカーが加えられた。

参加単位は23省、5市、4特区、香港、華僑（フィリピン、ジャワ、マレー等）38単位であり、日本占領下の5単位からも参加者があり、参加人員は2,700名であった。

競技結果は、

陸上競技 男子 トラック 1位上海51点、2位遼寧省24点、3位北平19点、4位南京14点、5位広東省12点、6位河北省10点。

フィールド 1位上海77点、2位マレー華僑22点、3位山西省17点、4位遼寧省15点、5位広東省13点、6位江蘇省10点。

全能（10種競技、5種競技、400M、1,600Mリレー）1位遼寧省19点、2位上海17点、3位広東省16点、4位北平15点、5位山西省7点、6位マレー華僑4点。

陸上競技 女子 1位上海116点、2位マレー華僑47点、3位広東省30点、4位福建省24点、5位河南省10点、6位青島8点。

水泳 男子 1位広東省57点、2位香港50点、3位マレー華僑30点、4位上海12点、5位広西省11点、6位福建省11点。

女子 1位広東省62点、2位香港40点、3位広西省15点、4位南京3点。

球技 男子 サッカー（19チーム参加）1位香港、2位マレー華僑、3位広東省、4位上海。バスケットボール（24チーム参加）1位河北省、2位南京、3位上海、4位北平。バレーボール（15チーム参加）1位上海、2位香港、3位広東省、4位マレー華僑。庭球（20チーム参加）1位上海、2位ジャワ華僑、3位四川省、4位マレー華僑。野球（5チーム参加）1位上海、2位広東、3位北平、4位河北省。

女子 バスケットボール（16チーム参加）1位上海、2位広東省、3位福建省、4位江蘇省。バレーボール（11チーム参加）1位上海、2位広東省、3位湖南省、4位北平。庭球（12チーム参加）1位山西省、2位上海、3位南京、4位四川。ソフトボール（6チーム参加）1位山東省、2位広東省、3位河北省、4位上海。

国術 男子 1位河南省、2位北平、3位上海、4位山東省、5位青島、6位南京。

女子 1位湖南省、2位河南省、3位上海、4位青島、5位南京、6位浙江省。

となっており、総合優勝は男女共に上海、総合2位は男女共に広東省が獲得した。

第7回全国運動会

第7回全国運動会は民国24年（1935年）3月11日公布の「全國運動大會舉行辦法」によって第6回全国運動会終了時に民国26年（1937年）秋に南京で開催と決定されていたが、民国26年7月7日に日中戦争が始まり国土が戦場となったために中止されてしまった。戦線は拡大してゆき太平洋戦争へと発展していった。この様な状態であったので競技会の開催は不可能であった。

第7回全国運動会は太平洋戦争が終結し（民国34年—1945年）、国民政府軍が共産党軍を軍事的に圧倒していた民国37年（1948年）5月5月～16日に上海で開催された。

参加単位は32省、12市、9華僑団体、陸・海・空軍、聯勤、警察の5単位計58単位²⁸となっているが、中国の省は25であり32はない。東北3省（遼寧、吉林、黒龍江）を満州国時代に12省に分割したのでそれによれば34省となる。

華僑は香港、マレー、インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイ等である。

参加人員の詳細は不明であるが、3,000余人といわれている。

競技種目も前回までとはかなり変更があった。男子は陸上競技、水泳、サッカー、バスケットボール、バレーボール、庭球単、複、ソフトボール、重量拳、ボクシング、レスリング、卓球の12種目、女子は、陸上競技、水泳、バスケットボール、バレーボール、ソフトボール、庭球単、複、卓球、レスリング（女子にレスリングとは理解にくるしむのだが、どの資料にもあるので実施したのであろう）の9種目であり、陸上競技はトラック、フィールドと分けていたのを一つとし、庭球を単、複に分け、野球と国術を種目からはずしてエキジビションとした。

エキジビションとしては野球、国術、アーチェリー、バドミントン、飛込、水球、競歩、器械体操、小型サッカーが行なわれた。

今大会においては6チーム以上参加している球技はトーナメントによって準々決勝までを行ない、準決勝出場チームでリーグ戦を行なうという形式で行なわれた。また、トーナメントで敗れたチーム間の勝者も決定した。

競技結果は、

陸上競技 男子 1位台湾省155点5、2位空軍69点、3位上海51点、4位海軍45点、5位マレー華僑26点、6位天津19点。

女子 1位青島47点、2位河北省37点、3位広東省33点、4位台湾省31点、5位福建省26点、6位北平22点。

水泳 男子 1位香港、2位マレー華僑、3位フィリピン華僑、4位インドネシア華僑。

女子 1位香港、2位台湾省、3位マレー華僑、4位タイ華僑。

球技 男子 サッカー—1位警察、香港、広東省（3者同率、上海失格のため4位無し）。バス

中国・全国運動会小史

ケットボール—1位上海, 2位フィリピン華僑, 3位聯勤, 4位警察。バレーボール—1位警察, 香港, 広東省, 4位上海。庭球単—1位広東省, 2位警察, 3位香港, 4位警察。庭球複—1位警察, 香港(2者同率), 3位マレー華僑, インドネシア華僑。ソフトボール—1位台湾省, 2位上海, 広東省, 警察。卓球—1位台湾省, 2位上海, 3位マレー華僑, 4位香港。

女子 バスケットボール—1位上海, 2位福建省, フィリピン華僑, インドネシア華僑。バレーボール—1位台湾省, 湖南省, 上海(3者同率), 4位広州。庭球単—1位広州, 2位インドネシア華僑, 3位上海, 4位マレー華僑。庭球複—1位インドネシア華僑, 2位広州, 3位マレー華僑, 4位上海。卓球—1位香港, 2位上海, 3位台湾省, 4位広東省。ソフトボール—1位広東省, 2位上海, 3位南京, 4位甘肅省。

重量拳 ライト級, ウェルター級, ミドル級, ミドルヘビー級の1位は総てマレー華僑であり, ヘビー級は警察であった。

ボクシングとレスリングは独特の階級制で試合を行なったので略する。⁽²⁴⁾

総合得点 男子 1位香港, 2位マレー華僑, 3位フィリピン華僑, インドネシア華僑。女子 1位香港, 2位台湾省, 3位マレー華僑, 4位タイ華僑。⁽²⁰⁾

なっており, 男女ともに台湾省の活躍が目立った。また, 総合得点の4位までに入ったところはフィリピンを除けば戦争の被害の比較的少ない地域であった。

注 (3) 立法院編譯處編「中華民國法規彙編廿四年編(四)」(民国25年—1936年), 中華書局, 教育127頁。

(4) 吳文忠著「中國體育發展史」(民国70年—1981年), 国立教育資料館, 88頁。

(5) 前掲(2)書, 48頁。

(6) 同上, 前掲(1)書, 76~88頁。

(7) 前掲(1)書, 79~81頁, 90頁。

(8) 前掲(1)書, 79頁。

(9) 前掲(2)書, 46頁。

(10) 前掲(2)書, 46~47頁。

(11) 前掲(2)書, 138頁。

(12) 前掲(1)書, 234頁。

(13) 全國運動大會辦事處編「全國運動大會總報告」(民国19年—1920年), 全國運動大會辦事處。

(14) 前掲(13)書, 運動員名題 3~4頁。

(15) 前掲(13)書, 運動項目及秩序 11頁。

(16) 前掲(13)書, 運動項目及秩序 10~17頁。

(17) 前掲(13)書, 運動成績記録 24~115頁。

(18) 前掲(13)書, 會計報告。

(19) 前掲(13)書, 運動成績記録 2~115頁。

(20) 前掲(4)書, 74~77頁。

(21) 前掲(2)書, 133頁。

(22) 前掲(1)書, 237頁。前掲(4)書, 139頁。

(23) 前掲(4)書, 139頁。

(24) 前掲(1)書 236~240頁, 前掲(2)書, 133~134頁。

中国・全国運動会小史

- 25) 多賀秋五郎著「近代中国教育史資料民国編下」(昭和50年), 日本学術振興会, 213頁。
- 26) 前掲(2)書, 134頁。
- 27) 前掲(4)書, 142~145頁, 前掲(2)書, 134頁。
- 28) 前掲(4)書, 214頁。
- 29) 前掲(4)書, 213~227頁。
- 30) 前掲(2)書, 135頁。

4. 中華人民共和国時代

1945年8月日本の敗戦により太平洋戦争は終結したが、中国における日本の占領地域の接収をめぐる国民党と共産党の間に争いが起こった。国共の相剋は米国の調停により一時小康を得たが、1947年1月以後両軍は本格的全面戦争に突入した。国民党軍は始めは優勢を示したが、1947年夏頃からこれが逆となり、各地を共産党軍に占領され、国民政府は1949年12月9日に台湾省に移転した。その間1949年10月1日に北京に中華人民共和国が設立した。

中華人民共和国は国家成立の翌年の1950年から朝鮮戦争に関係し、国家建設に力を注ぎ始めたのは朝鮮戦争が終結した以後である。1958年に毛沢東の主張した大躍進政策が失敗し、その上、1959年から3年続きの大凶作が起り毛沢東の主張した三面紅旗(社会主義建設における総路線・大躍進・人民公社化)の失敗であった。

この凶作局面を收拾し、破局に瀕した経済情勢を好転させたのは劉少奇の立案した再調整政策の効果であった。この成功により劉少奇の党内における権力は増大していった。劉少奇の政策に毛沢東は反対し両派の間に激しい権力闘争が展開された。

1966年に始まった文化大革命は毛沢東派と劉少奇派の権力闘争である。1966年4月頃には毛沢東派の主流派が勝利を収めたようにみえたが、実際には劉少奇派の実権派が依然として権力を握っており両派の間の闘争が続いていた。

1976年9月9日に毛沢東が死去し、10月に文化大革命派の四人組(江青, 張春橋, 王洪文, 姚文元)が追放され、文化大革命によって失脚した人達も帰り咲き四つの近代化(農業・工業・軍事・科学技術)が総ての面で推進されていった。

中華人民共和国における全国運動会は1958年6月21日に中華人民共和国体育運動委員会より公布された「中華人民共和国体育運動競賽制度(修訂草案)」により開催について定められている。

「中華人民共和国体育運動競賽制度(修訂草案)」には全国運動会について、

第二条 各種競技会の区分

- 一. 総合的運動会：若干の異った運動種目を含み規模が比較的大の運動会。

第三条 全国各種競技会の開催規定

四. 総合的運動会：4年に1回開催する。総合的運動会に含まれている種目についてはその年の状況によって種目別の選手権大会と等級競技会（運動員等級制度による同じ級のものによって行う競技会）を減少する場合もある。

第四条 全国各種競技の参加単位の規定

一. 総合的運動会：省、自治区（少数民族居住地域で省と同格）、中央直轄市（省と同格の市）、解放軍を参加単位とする。

と規定しており4年に1回の開催と定めている。

中華人民共和国成立後の第1回全国運動会は1959年に開催された。4年に1回開催と規定されているので、第2回は1963年に開催されることになっていたが、3年続きの凶作による経済不安から第2回は1965年の開催となっている。1966年に文化大革命が始まり政情不安が続いたために第3回の開催は1975年まで延期された。第3回以後は政情も安定しているので規定通りに第4回が1979年、第5回が1983年と4年毎に開催されている。

第1回全国運動会

第1回全国運動会は1959年9月13日～10月3日に北京の工人体育場で開催された。

参加単位は24省、2市、2自治区、解放軍の29単位であり、参加人員は10,658名で、競技種目は42としているが、42の競技種目は考えられない。例えば、ボートのフォアとエイトを別の種目として数えたのではないかと思われる。

“China's Sports”に出ている第1回全国運動会の種目は、陸上競技、水泳、水球、飛込、バレーボール、バスケットボール、サッカー、ハンドボール、野球、ソフトボール、ポロ、庭球、卓球、バドミントン、重量拳、体操、ボート、カヌー、射撃、アーチェリー、パラシュート、オートバイ、馬術、無線通信、航空模型、航海模型、武術とあり、外にエキジビション6（自転車、フェンシング、グレコローマンレスリング、フリースタイルレスリング、モーターボート、チェス）となっている。総計しても33種目であるが、同書にはそれ以外にいくつかの海の国防種目とあり、射撃もクレール、ピストルと内容により種目を別にしているので42となったのであろう。

競技結果は「新体育」、「China's Sports」に発表されているが、球技以外は入賞者の氏名、記録のみで所属が不明であるので所属の判明しているものについてのみ書くことにする。

バスケットボール 男子 1位四川省、2位北京、3位解放軍。女子 1位上海、2位吉林省、3位河北省。

バレーボール—男子 1位上海、2位解放軍、3位湖北省。女子 1位解放軍、2位上海。

卓球—男子 1位上海。女子 1位北京。

バドミントン—男女共福建省，庭球—男女共上海，ハンドボール—男子解放軍，女子北京，野球—上海，ソフトボール—北京，水球—解放軍，ボート—解放軍，カヌー—黒竜江省，体操—解放軍となっており，大都市と軍が各種目に活躍をしている。

第2回全国運動会

第2回全国運動会は1965年9月11日～28日に北京の工人体育場で開催された。参加単位は第1回大会と同様に人民解放軍を含めて29であり，参加人員は5,922人（内女子2,011人）であり競技種目は22種目となっていた。その内訳は，サッカー，バスケットボール，バレーボール，卓球，庭球，バドミントン，水泳，水球，飛込，陸上競技，体操，重量拳，フェンシング，レスリング（グレコローマン，フリースタイルと中国式），射撃，アーチェリー，自転車，オートバイ，落下傘降下，無線，航海模型，航空模型であり，エキジビションとして武術が行なわれた。

競技結果

「China's Sports」には陸上競技，水泳，体操，重量拳については1位から3位までの成績しかのせていないので，それによって順位をつけると，

陸上競技—男子 1位上海，2位解放軍，3位河北省。女子 1位北京，2位山東省，3位解放軍。

水泳—男子 1位広東省，2位上海，3位解放軍。女子 1位広東省，2位上海，3位河北省。

重量拳—1位解放軍，2位河北省，3位湖南省。

体操—男子 1位上海，2位解放軍，3位広東省。女子 1位甘肅省，2位広西省，3位雲南省。

アーチェリー—男子 1位山東省，2位青海省，3位西藏自治区。女子 1位解放軍，2位内蒙古自治区。女子 1位解放軍，2位内蒙古自治区，3位上海。

射撃—男子 1位解放軍，2位上海，3位河北省。女子 1位遼寧省，2位解放軍，3位雲南省。

球技 卓球—男子 1位上海，2位北京，3位湖北省。女子 1位上海，2位四川省，3位広東省。バドミントン—男子 1位福建省，2位広東省，3位湖南省。女子 1位湖北省，2位広東省，3位福建省。バスケットボール—男子 1位北京，2位新疆省，3位甘肅省。女子 1位解放軍，2位湖北省，3位甘肅省。バレーボール—男子 1位北京，2位上海，3位広東省。女子 1位新疆省，2位遼寧省，3位山東省。サッカー—1位河北省，2位上海，3位解放軍。

中国・全国運動会小史

となっており、古くからスポーツの盛んな地域が強さを発揮していたが、一部の種目についてはかつてはスポーツなど考えられなかった西藏、内蒙古、甘肅省などが抬頭して来ている。

第3回全国運動会

第3回全国運動会は1975年9月12日～28日に北京で開催され、台湾省を含む省、特別市、自治区、解放軍の31単位から1万余人が参加した。

今大会の競技種目は28種でその内訳は陸上競技、水泳、サッカー、バスケットボール、バレーボール、庭球、卓球、バドミントン、野球、ソフトボール、ハンドボール、体操、重量挙げ、フェンシング、射撃、アーチェリー、武術、自転車、スキー、スピードスケート、フィギュアスケート、ボート、中国相撲、将棋類(チェス、囲碁、中国将棋)、自転車、飛込、航空模型、技巧運動、となっており、その他にエキシビジョンとして馬術、落下傘降下、航海模型があり、また、児童、少年の8種目の競技が行なわれた。³⁸⁾

第3回大会になって中華民国時代を含めて実施されていなかった冬季種目のスキー、スケートが種目として取りあげられ、全国運動会種目として冬季に競技が行なわれた。

競技結果については「China's Sports」は文化大革命によって停刊中であり、「新体育」、「体育報」も1966年～75年は停刊、海外発送停止がたびたび行なわれたので、第3回全国運動会の記録は入手出来なかった。

第4回全国運動会

第4回全国運動会は1979年9月15日～30日に北京で開催された。参加単位は台湾省を含む省、特別市、自治区、解放軍の31単位で、競技種目は34種目、参加者は15,144人であった。この15,144人という数は、2月から8月にかけて行なわれた地区予選参加者7,475人、北京以外の都市で決勝の行なわれた10種目の参加者3,890人と北京で決勝の行なわれた21種目の参加者3,779人の合計である。³⁹⁾

競技種目は、陸上競技、水泳、水球、飛込、ボート、重量挙げ、体操、巧技、射撃、アーチェリー、自転車、サッカー、バスケットボール、バレーボール、卓球、庭球、バドミントン、野球、ソフトボール、フェンシング、レスリング、武術、棋類(囲碁、チェス、中国将棋)、スピードスケート、フィギュアスケート、アイスホッケー、スキー、オートバイ、モーターボート、落下傘降下、航空模型、航海模型、潜水、となっている。⁴⁰⁾

北京以外で決勝の行なわれた種目は、

スキー 2月15日～20日黒竜江省尚志県。⁴¹⁾

スピードスケート 3月4日～9日新疆ウイグル自治区ウルムチ。⁴²⁾

ハンドボール 7月15日～20日河北省保定。⁴³⁾

航空模型 7月20日～8月10日四川省成都。⁴⁴⁾

中国・全国運動会小史

モーターボート 8月19日～27日山東省青島。⁴⁵⁾

レスリング 9月7日～17日河北省保定。⁴⁶⁾

潜水 9月10日～14日湖南省長沙。⁴⁷⁾

庭球 9月15日～26日上海。

卓球 9月15日～26日天津。

武術 9月16日～27日河北省石家荘。⁴⁸⁾

ボート 5月5日～12日浙江省杭州。⁴⁹⁾

種目の一部を北京以外で実施したのは、男子バレーボール8月1日～12日新疆ウイグル自治区ウルムチ、自転車ロードレース7月5日～13日太原⁵⁰⁾、マラソン内蒙古ホホフトである。

競技結果

各競技の1～3位入賞の多いチームは

チ ャ ム	1 位	2 位	3 位
解 放 軍	50	42	46
北 京 市	44	42	53
広 東 省	44	41	39
黒 竜 江 省	38	52	32
上 海 市	36	32	33
吉 林 省	30	21	31
遼 寧 省	28	28	16
山 西 省	21	18	16
山 東 省	21	14	12
江 蘇 省	19	20	34

51)

となっており、黒竜江省、吉林省の上位進出はそれぞれスキー、スケートで他のチームをよせつけない圧倒的強さのためであり、広東省は水泳、飛込、水球、ボートの活躍によってである。

3位までの入賞者数により種目別の順位をつけると、

陸上競技—男子 1位北京、2位広東省、3位広西省。女子 1位浙江省、2位広東省、3位河北省。

水泳—男子 1位解放軍、2位広西省、3位天津。女子 1位解放軍、2位広西省、3位上海。

水球—1位広西省、2位広東省、3位上海。

飛込—男子 1位広東省、2位湖北省、3位遼寧省。女子 1位広東省、2位上海、3位河北省。

中国・全国運動会小史

スキー—男子 1位黒竜江省, 2位吉林省, 3位解放軍。女子 1位黒竜江省, 2位解放軍, 3位吉林省。

スピードスケート—男子 1位吉林省, 2位黒竜江省, 3位遼寧省。女子 1位黒竜江省, 2位吉林省, 3位佳木斯。

ボート—男子 1位湖北省, 2位解放軍, 3位広東省。女子 1位上海, 2位湖北省, 3位広東省。

重量拳—1位天津, 2位江蘇省, 3位湖北省。

射撃—男子 1位解放軍, 2位北京, 3位陝西省。女子 1位内蒙古, 2位天津, 3位遼寧省。

アーチェリー—男子 1位山西省, 2位山東省, 3位新疆ウイグル自治区。女子 1位遼寧省, 2位青海省, 3位上海。

サッカー—1位山東省, 2位北京, 3位広東省。

バスケットボール—男子 1位解放軍, 2位湖北省, 3位広東省。女子 1位北京, 2位遼寧省, 3位解放軍。

バレーボール—男子 1位江蘇省, 2位解放軍, 3位福建省。女子 1位四川省, 2位江蘇省, 3位上海。

ハンドボール—男子 1位解放軍, 2位広西省, 3位北京。女子 1位上海, 2位安徽省, 3位北京。

野球—1位北京, 2位天津, 3位解放軍。

ソフトボール—1位北京, 2位上海, 3位天津。

卓球—男子—1位遼寧省, 2位湖南省, 3位北京。女子 1位解放軍, 2位河北省, 3位天津。

庭球—男子 1位上海, 2位北京, 3位天津。女子 1位北京, 2位上海, 3位湖北省。

バドミントン—男子 1位江蘇省, 2位福建省, 3位広東省。女子 1位上海, 2位福建省, 3位遼寧省。

体操—男子 1位江蘇省, 2位広東省, 3位北京。女子 1位解放軍, 2位浙江省, 3位湖南省。

等となっている。

注 (31) 「新体育」1958年13期, 人民体育出版社, 32~33頁。

(32) 前掲(31)書, 1959年18期, 3頁。

(33) 「China's Sports」1959年 No.5号, China's Sports 社, p.p. 8~14, p. 23。

中国・全国運動会小史

- (34) 前掲(33)書, p. p. 8～14。
- (35) 前掲(33)書, 1965年 No. 11～12号, p. 6。
- (36) 「体育報」745期, 1965年3月22日, 体育報社, 1頁。
- (37) 前掲(35)書, p. p. 62～67。
- (38) 前掲(31)書, 1975年3月号, 33頁。
- (39) 前掲(36)書, 1732期, 1979年3月9日, 1頁。
- (40) 前掲(31)書, 1979年4月号, グラビア頁。
- (41) 前掲(36)書, 1734期, 1979年3月14日, 1頁。
- (42) 前掲(36)書, 1790期, 1979年7月23日, 1頁。
- (43) 前掲(36)書, 1779期, 1979年6月27日, 4頁。
- (44) 前掲(36)書, 1806期, 1979年8月29日, 4頁。
- (45)(46)(47) 前掲(36)書, 1809期, 1979年9月5日, 1頁。
- (48) 前掲(36)書, 1753期, 1979年4月27日, 1頁。
- (49) 前掲(36)書, 増刊, 1979年9月28日, 1頁。
- (50) 前掲(31)書, 1979年10月号, グラビア頁。
- (51) 前掲(36)書, 1819期, 1979年9月29日, 4頁。
- (52) 前掲(36)書, 1727期, 1979年2月26日, 1734期—3月14日, 1761期—5月16日, 1788期—7月18日, 1791期—7月25日, 1821期—10月3日, 1822期—10月5日, 1823期—10月8日, 1827期—10月17日, 1831期—10月26日。

5. 全国運動会の中国スポーツ界への功績

20世紀の始めにおいて世界のスポーツのレベルから見ればまったくのスポーツ後進国であった中国が1970年代にはアジアで最強であった日本を抜きさり、卓球、バドミントン、飛込では世界の最高水準に達し、2000年には世界スポーツ界の最高峯に到達するという第4回全国運動会(1979年)のスローガンの達成に向けて著々と歩を進めている。この中国のスポーツの発展に全国運動会が何らかの形で寄与していることはたしかである。

省、市を代表して出場する選手は他の地区の選手には負けたくないとして技術の向上に励んだであろうし、陸上競技、水泳においては記録の向上に努めたであろう。また、回を追って競技種目が増加していったことは競技人口＝スポーツ人口の増加を示しているのである。

全国運動会が中国スポーツ界に功績をもたらしたことは間違いのないことであるが、明らかな点をいくつかあげてみる。

1. 中国人競技役員の養成

第1回全国運動会(全国学校区分隊第一次体育同盟会—清・宣統2年～1910年)、第2回全国運動会(民国3年—1914年)はその企画の立案並びに運営はY. M. C. A.の手によって行なわれ、競技役員も総てY. M. C. A.関係の外国人であった。そのため、競技会要項、プログラムも英文であった。

中国・全国運動会小史

民国8年(1919年)に始まった五・四運動はそのスローガンの中に「中国是中国人的中国」というのがあり各界でこれらのスローガンを実施していったが、スポーツ界も競技役員を中国人で充当する方針を実施していき、第3回全国運動会(民国13年—1924年)からは水泳と野球を除く全役員が中国人となった。

五・四運動という中国化運動があったにしても、全国運動会を実施していなかったら短期間に中国人の競技役員を大量に養成出来たであろうか。

2. 施設の充実

全国運動会を開催するとなると施設がなくてはならない。そのため全国運動会の開催地となった都市は競技場などの施設を完備しなくてはならなかった。このことはとりもなおさず全国運動会の開催によって中国の体育施設が充実されていったのである。

民国24年(1935年)に公布された「全國運動大會舉行辦法」により首都と各省市の適当な地と交互開催となり、首都以外の都市は体育施設の完備した所と定められたので、全国運動会の開催地は体育施設を整備しなくてはならなかった。

民国22年(1933年)の第5回開催地の南京は143万余元で施設を整備しているし、民国24年(1935年)の第6回の開催地の上海は100万元で体育施設を整備している。また、中華人民共和国は1979年の第4回全国運動会にそなえて主競技場の北京の工人体育場を全天候型に改良している。

3. 競技人口の増加

全国運動会は第3回までは地区対抗であり、第4回から中華人民共和国の第4回まで省・市・特別区(特別区は中華人民共和国成立以後)を参加単位としており、競技種目も第1回4、第2回6、第3回7、第4回男子7、女子4、第5回、第6回男子8、女子6、第7回男子11、女子8と回を追うごとに増加していった。中華人民共和国になると第1回32、第2回22、第3回28、第4回33と中華民国時代に比較して急激に競技種目が増加していった。

上位進出を目指すには全種目に出場しなくてはならず、また、他省・他市に勝つために多くの種目に出場しなくてはならない。前回不出場の種目にも次回は出場するという方針をとった省、市が多かった。そのため競技人口は必然的に増加していったのである。

4. 記録の向上

全国運動会は開催のたびに中国新記録、世界新記録が出ている。記録の明らかなものについて書くと、第5回中国新記録8、第6回中国新記録19、第7回中国新記録14、中華人民共和国第1回世界新記録4、中国新記録106、第2回世界新記録10、中国新記録130、第3回世界新記録3、中国新記録62、第4回世界新記録5、中国新立録102となっている。これを見ても全国運動会を目標として記録の向上をはかっていることがわかる。

中国・全国運動会小史

メートル制を採用した民国13年(1924年)の第3回(女子は第5回)、民国37年(1948年)、中華人民共和国の第2回(1965年)、第4回(1979年)の陸上競技と水泳の記録を比較すると(種目は各回ともに実施したもの)、

		年	1924年	1948年	1965年	1979年	
		種目					
陸上競技	男	100M	12秒0	10秒8	10秒4	10秒53	
		200M	24秒2	22秒9	21秒4	21秒42	
		400M	57秒6	52秒2	48秒4	47秒94	
		800M	2分16秒0	2分03秒0	1分52秒7	1分51秒7	
		1,500M	4分47秒2	4分23秒2	3分49秒5	3分54秒7	
		5,000M	18分22秒4		14分28秒9	14分00秒8	
		10,000M		34分11秒6	30分37秒2	29分25秒7	
		110M障害	17秒6	16秒3	13秒9	14秒15	
		10種競技	4,053点	4,989点	6,366点	7,258点	
		400Mリレー		44秒6	41秒1	41秒03	
	1,600Mリレー	4分01秒0	3分46秒0	3分13秒0	3分13秒7		
	走高跳	1M72	1M80	2M15	2M16		
	走幅跳	6M25	6M47	7M40	7M75		
	三段跳	12M43	14M01	16M41	16M62		
	棒高跳	3M25	3M52	4M70	5M20		
	円盤投	31M52	41M13	51M88	56M50		
	砲丸投	12M62	12M72	16M82	17M18		
	槍投	43M87	47M56	69M61	80M48		
	女子	100M	13秒8	13秒4	11秒7	12秒02	
		200M		28秒7	24秒3	24秒67	
400Mリレー			55秒7	47秒1	46秒59		
走高跳		1M28	1M40	1M77	1M85		
走幅跳		4M79	4M83	6M28	6M31		
砲丸投		10M35	10M97	16M37	16M69		
円盤投		28M66	30M05	54M29	58M58		
槍投			27M84	49M33	55M92		
		年	1924年	1948年	1965年	1979年	
		種目					
水泳	男	100M自由形	1分33秒8	1分03秒0	54秒3	53秒94	
		400M自由形	8分45秒4	5分44秒6	4分31秒0	4分14秒76	
		1,500M自由形	39分45秒0	23分02秒0	18分17秒2	16分53秒23	
		100M背泳		1分16秒9	1分06秒5	1分01秒05	
	女子	200M平泳		3分06秒9	2分32秒5	2分25秒98	
		200Mリレー	2分25秒0	1分57秒1			
		800Mリレー		11分04秒3	8分37秒3	8分05秒75	
女子	100M自由形	(1933年) 1分33秒3	1分20秒6	1分05秒9	1分01秒13		
	400M自由形		7分16秒3	5分17秒6	4分34秒82		
	100M背泳		1分37秒4	1分17秒6	1分08秒45		
	200M平泳		3分41秒1	3分01秒9	2分45秒74		

中国・全国運動会小史

(中華民国時代と中華人民共和国になってからとでは陸上競技、水泳ともに競技種目にかなりの違いがあるので各回ともに実施した種目のみに留めた。水泳のバタフライは戦後の種目なので1950年以前には無い、また、女子リレーは距離が異なるので省いた。)

表でもわかるように回を追うごとに記録は向上していつている。

全国運動会を実施するために中国人の競技役員を養成し、会場となった都市の施設が充実されており、種目の増加につれて各地の競技人口は増加してゆき、また、回を追って記録が向上していったことなどからして全国運動会の中国スポーツ界への功績は多大なものがあったと言えるだろう。

- 注 53) 前掲(4)書, 139頁。
54) 前掲(4)書, 142頁。
55) 前掲(2)書, 134頁。
56) 前掲(4)書, 215頁。
57) 前掲(31)書, 1959年19期30頁。
58) 前掲(35)。
59) 「スポーツマガジン」7巻1号(昭和55年2月), ベースボールマガジン社, 102頁。
60) 前掲(49)。
61) 前掲(2)書, 218~227頁, 前掲(50)。

6. む す び

中国において全国的競技会の開催されたのは清・宣統2年(1910年)の「全国学校区分隊第一次体育同盟会」である。この競技会は地区対抗の形式を採ったが参加者は僅かに140人であった。この競技会は中華民国になると第1回全国運動会と称することになった。

辛亥革命によって清が倒れ中華民国が成立すると民国3年(1914年)に第2回全国運動会が開催された。この大会も地区対抗の形式で行なわれた。第1回, 第2回の大会はヤード制で競技が行なわれ, 競技役員は総て外国人でありプログラムも英文であった。

競技種目は第1回が陸上競技, バasketボール, サッカー, 庭球の4種目であり, 第2回にはバレーボールと野球が加わって6種目となった。

中華民国が成立したとは言うものの政情は不安定であり, 第2革命, 第3革命, 南北の対立, 軍閥の抗争が続き国民政府により中国がほぼ統一されたのは民国17年(1928年)である。国内が一応安定したのもつかのまでであり, 1931年からは日本の中国侵略が始まり, 1937年には日中戦争が起こり, これが太平洋戦争へと発展していった。太平洋戦争は1945年に日本の敗戦により終結したが, 日本の占領地域の確保をめぐる国民党と中国共産党の間に争いが起こっ

中国・全国運動会小史

た。米国の調停により一時は小康状態となったが、1947年には国共の内戦となった。内戦に敗れた国民政府は1949年に台湾省へ移転した。

このような政治状態であったので全国運動会も定期的に開催することは不可能であった。民国24年（1935年）公布の「全國運動大會舉行辦法」で2年ごとに首都と他の都市で交互に開催すると定めていたが実施は困難であった。

中華民国時代には民国3年（1914年）に第2回、民国13年（1924年）に第3回、民国19年（1930年）に第4回、民国22年（1933年）に第5回、民国24年（1935年）に第6回、民国37年（1948年）に第7回が開催されている。

湖北省武昌で開催の第3回からは米制を採用したが、未だ地区対抗の形式であった。第3回からは運営は中国人が行なうことになり、競技役員も一部の種目を除いて総て中国人となった。競技種目に水泳が加わって7種目となり、女子の球技のエキジビションも行なわれた。参加人員は340余人であり、総合成績の1位は華北であった。

第4回大会は政情の不安から第3回大会の6年後の民国19年（1930年）4月に浙江省杭州で開催された。第4回からは参加単位が省・特別市・華僑団体となり、第4回には14省、5特別市、1特別区、2華僑の22単位が参加した。第4回からは新たに女子の陸上競技、バスケットボール、バレーボール、庭球の4種目が加わり、参加人員は男子1,163人、女子464人の計1,627人であった。各種目の優勝は陸上競技男子遼寧省、女子広東省、バスケットボール男子天津、女子北平、バレーボール男子広東省、女子天津、庭球男子広東省、女子天津、サッカー上海、水泳、野球香港であった。

第5回大会は民国22年（1933年）10月に南京で開催され、22省、4特別市、3華僑団体の29単位から男子1,542人、女子706人、計2,248人であった。競技種目に男女の国術（武術）と女子の水泳、ソフトボールが加わった。総合優勝は上海であった。第5回大会の総経費は195,800元であった。

第6回大会は民国24年（1935年）10月に上海で開催され、23省、5特別市、4特別区、6華僑団体の38単位から2700名が参加した。第6回から陸上競技の採点法がトラック、フィールド、全能（5種競技、10種競技）と分けて行なうことになった。競技種目は第5回と同じであったが、エキジビションとして5種目が行なわれた。総合優勝は男女共上海であり、総合2位は男女共に広東省であった。

第7回大会は規定に従って民国26年（1937年）秋に南京で開催と決定されていたが、民国26年7月7日に日中戦争が始まりそれが太平洋戦争に発展したために競技会の開催は不可能になってしまった。第7回大会は太平洋戦争が終結し、国民政府軍が軍事的に共産党軍を圧倒していた民国37年5月に上海で開催され、32省、12特別市、9華僑団体、陸・海・空軍、聯勤、警

中国・全国運動会小史

察の58単位（中国の省は25であるが、日本占領時代東北地方を12省に分割したのでそれによれば34省となる）から3,000余人が参加した。競技種目は大幅に増加して男子12種目、女子9種目となりエキジビションとして野球、国術等9種目が行なわれた。

総合得点は男子1位香港、2位マレー華僑、女子1位香港、2位台湾省であり、男女ともに台湾省の活躍が目立ち、また、総合得点の上位に入ったのは戦争の被害の比較的少ない地方であった。

1949年に成立した中華人民共和国は1958年公布の「中華人民共和国運動競賽制度（修訂草案）」で総合競技会を4年に1回開催すると定めている。この規定に従って第1回の全国運動会を1959年に開催したが、第2回は3年続きの凶作による経済不安から1965年に延期された。1966年に文化大革命が始まり政情不安が続いたために第3回は1975年となった。その後は規定通りに第4回が1979年、第5回が1983年の開催となっている。

第1回全国運動会は1959年9月に北京で開催され、24省、2特別市、2自治区、解放軍の29単位から10,658名が参加した。競技種目は42種目で、解放軍と大都市が活躍した。

第2回全国運動会は1965年9月に北京で開催され、前回と同じ29単位から5,922人（内女子2,011人）が参加した。競技種目は22種目で、古くからスポーツの盛んな地域が強さを発揮していたが、一部の種目ではかつてスポーツなど考えられなかった西藏、内モンゴル、甘粛省などが抬頭して来た。

第3回全国運動会は1966年から始まった文化大革命のために第2回から10年後の1975年9月に北京で開催され、台湾省を含む省、特別市、自治区、解放軍の31単位から1万余人が参加した。競技種目は28種目で全国運動会に始めてスキー、スケートが競技種目として加えられた。

第4回全国運動会は1979年9月に北京で開催され、前回と同じ台湾省を含む31単位から15,144人が参加した。（15,144人は地区予選参加者7,475人、北京以外の都市で決勝の行なわれた種目の参加者3,890人、北京で決勝の行なわれた種目の参加者3,779人の合計である。）競技種目は34種目で、1・2・3位の入賞者の多かったのは、解放軍、北京、広東省、黒竜江省、上海、吉林省である。黒竜江省と吉林省の上位進出はスキー、スケートで他をよせつけない圧倒的の強さを示したためである。

全国運動会は中国の政治状況のために第1回の開催された1910年から1983年までの73年間に12回という開催にすぎなかったが、回を追うごとに記録は向上し、種目の増加につれて競技人口は増加しており、かつてはスポーツなど考えられなかった地域からも選手を輩出するようになった。また、全国運動会にそなえて体育施設も充実していっているため、全国運動会は中国のスポーツの発展に大きく寄与していると言えるであろう。

（昭和58年5月19日）